

平成三十年（二〇一八年）七月二十六日（木曜日）

丑 寅会

安藤 浩

今日は、前回の「辺塞詩人」の後半の説明と其の二として「女心の詩」について話を進めたいと思います。

○張籍（七六五年〜八三十年）字は文昌。安徽省和縣の人。江蘇省呉縣の人ともいう。七九九年の進士。水部郎に進んだので、張水部とも呼ばれ、後に韓愈の推薦により国子博士になり国子司業に至ったので張司業とも呼ばれた。早年生活貧困、後入仕途、也祇是閒職下僚。他的詩材広泛、善於叙事、樂譜詩著名、对民間疾苦、社会隱暗、頗多諷喻。白居易推重他。……
「如何欲五十、官小身賤貧。病眼街西住、無人行到門」

節婦吟 張籍

君知妾有夫 君は妾に夫有るを知り

贈妾双明珠 妾に双つの明珠を贈れり

感君纏綿意 君が纏綿の意に感じ

繫在紅羅襦 紅羅襦に繫げり

妾家高楼連苑起 妾が家の高楼は苑に連り起り

良人執戟明光裏 良人は戟を明光の裏に執る

知君用心如日月 君が心を用うること日月如くなるを知るも

事夫誓擬同生死 夫に事えて生死を同じくせんと誓擬す

還君明珠双淚垂 君に明珠を還さんと双淚垂

恨不相合未嫁時 恨むらくは相逢うこと未だ嫁がざる時ならざるを

○杜秋娘（七九〇年〜八三十年）は、金陵（江蘇省南京市）の人。娼家の女であったが、十五の時、鎮海節度使李錡に身請けされてその妾となった。この詩は杜秋娘が李錡に酒をすすめながら歌った詩として伝えられている。杜秋娘十八の時、李錡が反逆の罪で腰斬の刑となり、その後入宮、有寵於憲宗。後又回郷、窮老無依。故旧時又以杜秋娘~~汝~~指年老色衰婦女。大概因她善唱此曲、故題其名。

金縷衣

杜秋娘

勸君莫惜金縷衣

君に勸む惜しむ莫れ金縷の衣

勸君須惜少年時

君に勸む惜しむ須し少年の時

花開堪折直須折

花開きて折るに堪えなば 直に折る須し

莫待無花空折枝

花無きを待ちて空しく枝折る莫れ

子夜歌

無名詩

擘裾未結帶

裾を擘りて未だ帯を結ばず

顰眉出前窗

眉を顰めて前窗に出ず

羅裳易飄颻

羅裳飄颻し易く

小開罵春

少し開きて春風を罵る

子夜歌

無名詩

摯枕北窗臥

枕を摯りて北窓に臥す

郎來就妾嬉

郎来りて妾に就きて嬉しむ

小喜多唐突

小喜は唐突多し

相憐能幾時

相憐れむ能く幾時ぞ

○ 陸游（一一二五年～一一二〇年）字は無觀。浙江省紹興市紹興縣の人。生涯金に対する交戦派。和平派が主流であった政界では不遇に終わる。詩人としては、南宋の第一人者。

沈園（二首の其二）

陸游

城上斜陽画角哀

城上の斜陽画角哀し

沈園非復旧地台

沈園復旧池台にあらず

傷心橋下春波綠

傷心す橋下の春波綠なるに

曾是驚鴻照影來

曾て是れ驚鴻の影を照らし来れり

○岑 參（七一五年〜七七〇年知り）涇陽（今河南泌陽縣）人。父親岑植、曾兩任刺史、但在岑參少時即死去、乃從兄受學、刻苦讀書。天寶進士。初為小官、後充安西節度使府掌書記及安西、北庭節度使判官。大曆初任嘉州刺史、後又罷官。卒於成都旅舍。新舊「唐書」都無傳、他少經孤寒、早具懷抱、「丈夫三十未富貴、安能終日守筆硯」。已可見其志概。兩赴辺塞之後、他的意氣固然舒發了、詩歌也有了新的生命。西北的大沙漠、大風雪、大戰役、一齊進入他的眼底、出現他的筆端。他在辺塞的時間雖然不長、可是辺塞却成為這位沙漠歌手創作的用土。同時他又以号以豪邁樂觀的氣概、歌唱了這是在艱難辛苦荒涼的環境中、鎮守着祖國西北的將士連。唐室的「軍威」也通過他的詩流傳發揚。

磧 中 作

岑 參

走馬西來欲到天

馬を走らせ西來天に到らんと欲す

辭家見月兩回圓

家を辭してより、月の兩回圓なるを見る

今夜不知何處宿

今夜知らず何処に宿るを

平沙万里人煙絕

平沙万里人煙絶つ

胡茄歌送顔真卿使赴河隴

岑 參

君不聞胡茄聲最悲

君聞かずや胡茄の聲最もかなしきを

紫髯綠眼胡人吹

紫髯綠眼の胡人吹く

吹之一曲猶未了

之を吹く一曲猶未だ了らざるに

愁殺樓蘭征戍兒

愁殺す樓蘭征戍の兒

涼秋八月蕭關道

涼秋八月蕭關の道

北風吹斷天山草

北風吹き断つ天山の草

崑崙山南月欲斜

崑崙山南月斜めならんと欲

胡人向月吹胡茄

胡人月に向つて胡茄を吹く

胡茄怨兮將送君

胡茄の怨み將に君を送らんと欲す

秦山遙望隴山雲

秦山遙に望む隴山の雲

辺城夜夜多愁夢

辺城夜夜愁夢多し

向月胡茄誰喜聞

月に向かつて胡茄誰か聞くを喜ばん